第2章

千葉市の概況

これからのまちづくりについて考える際には、その前提として、千葉市のこれまでの歩みや現況、そして将来展望について理解することが重要です。

第２章では、地理や歴史などの概況を示すとともに、本市の特性を明らかにします。

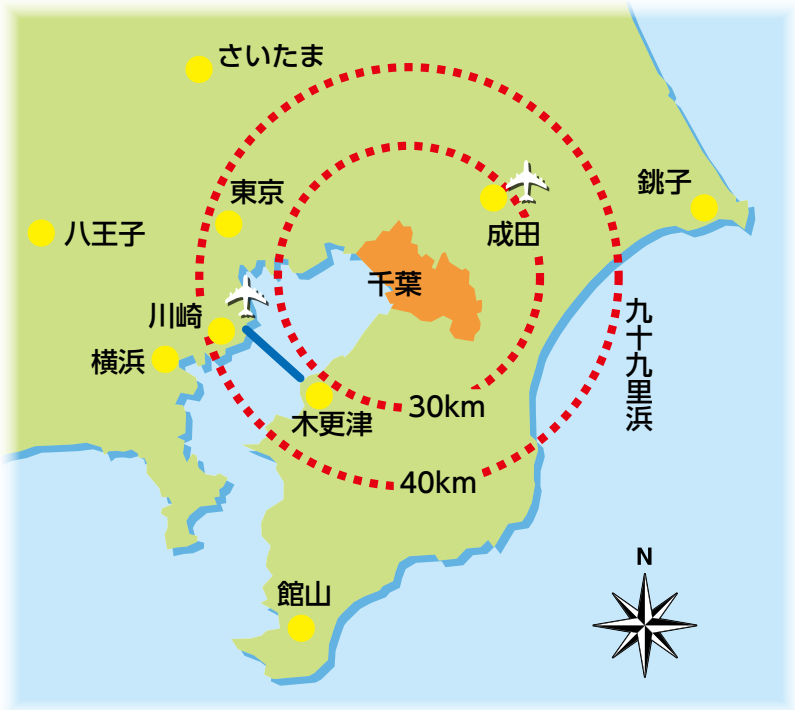
1 位置・地勢

千葉市は東京湾の湾奥部に面し、千葉県のほぼ中央部、東京都心部から東に約40㎞に位置します。成田国際空港及び木更津市（東京湾アクアラインの接岸地）からそれぞれ約30㎞の距離にあります。また、鉄道や幹線道路の結節点として、県内交通の要衝となっています。

市域面積は約272㎢ で、地形は花見川や都川、鹿島川などの河川によって刻まれた低地と台地、東京湾沿いに広がる約34㎢の埋立地に大別されます。

全体的に平坦な地形のため、都市の成長とともに市街化が進みましたが、内陸部には緑豊かな自然環境が残されており、また延長約42㎞に及ぶ海岸線や13の河川を擁するなど、大都市でありながら緑と水辺に恵まれていることが特長です。

千葉市の位置

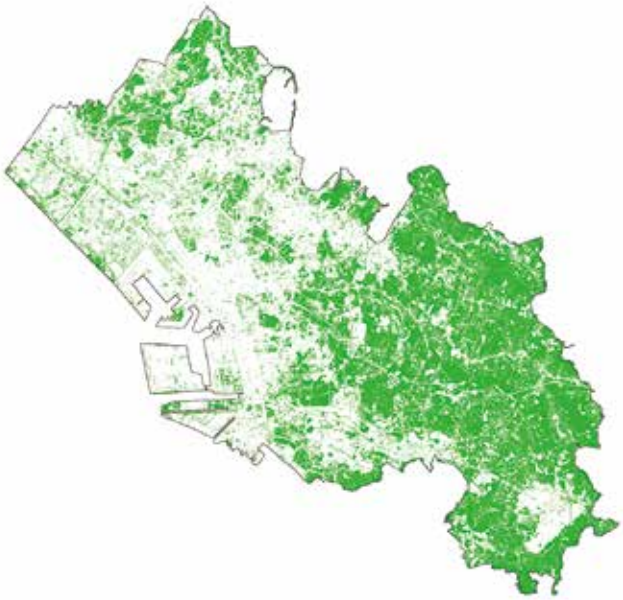


（出典）千葉市

千葉市の自然

（出典）国土地理院

千葉市の緑被（令和２年（2020年））



（出典）千葉市

■千葉市の交通

千葉県内の鉄道路線図

（出典）千葉県総合計画「次世代への飛躍　輝け！ちば元気プラン」
P253　鉄道路線図を基に作成

千葉県内の道路網

（出典）千葉県ハンドブック

2 千葉市のあゆみ

ここでは、これからのまちづくりを考える前提として、千葉市の成り立ちや発展の過程など、縄文から現在の大都市に至るまでのあゆみを振り返ります。

（1）縄文時代～加曽利貝塚から見える持続可能な暮らし～

千葉市は貝塚に限らず縄文時代の遺跡数が面積比率で全国1位と、当時からとても住みやすい場所だったことが推測されます。その中でも、約5,000年～ 3,000年前の縄文時代に作られた加曽利貝塚は日本最大級の貝塚で、国の特別史跡に指定されています。

当時の人々は、その糧を自然に委ね、動物を含めた生命への畏敬を持つなど、自然と一体となった暮らしを営んでおり、このような精神のありようは、地球温暖化に伴う気候変動などに直面し、SDGsに取り組む現代のわたしたちに貴重な示唆を与えてくれています。

（2）古墳時代から平安時代 ～千葉郡と武士のおこり～

市域には古墳が多く築かれ、飛鳥時代後期から始まった律令制下では主に下総国千葉郡に含まれており、朝廷から派遣された下総国司のもと、この地の有力豪族が郡司に任じられて統治を行いました。

平安時代になると治安が悪化し、房総にも武士がおこりました。「平将門の乱」「平忠常の乱」を通じて、その子孫達は、次第に房総半島の各地に進出し大きな力を蓄えるようになります。

（3）鎌倉時代 ～千葉氏の隆盛 ～

大治元年（1126年）、千葉常重が大椎（緑区）から現在の亥鼻付近（中央区）に本拠を移したことにより、千葉氏と千葉のまちの繁栄が始まったと言われています。

常重の子の常胤は、石橋山の戦いに敗れて安房（千葉県南部）に逃れて来た源頼朝のもとにいち早く参陣しました。また、源平合戦や奥州合戦などにも参加し、鎌倉幕府の創設に大きく貢献しました。この功績によって常胤は上総国と下総国を中心に、東北から九州まで全国に多数の所領を獲得し、幕府の中でも屈指の御家人に成長しました。

（4）室町時代から江戸時代～人と物の行き交う交通の要衝として～

下総の守護として大きな勢力を有していた千葉氏ですが、次第に一族内で争いを繰り返すようになり、康正元年（1455年）、当主であった千葉胤直は館を攻められ敗れてしまいます。後に拠点を本佐倉城に移していますが、その後も、引き続き港町、妙見宮などの門前町として賑わいました。

戦国期には勢力を拡大していた小田原北条氏に従うようになりますが、天正18年（1590年）、豊臣秀吉による小田原攻めによって領主としての千葉氏は滅びました。

江戸時代、市域は佐倉藩領や生実藩領、旗本領、寺社領に分かれていました。佐倉藩領であった千葉のまちは、登戸・寒川（中央区）の両港と江戸を結ぶ水運や、房総往還、佐倉街道などの街道が交わる要衝として繁栄を続けました。

（5）本格的な都市形成 ～千葉県の誕生～

明治政府は、藩を廃止して県を置きましたが、明治6年（1873年）に千葉町に県庁が置かれ、千葉県が誕生しました。県庁設置後、総武鉄道千葉駅が開業するなど県内の政治の中心となり、次々と官庁や学校等の施設が建てられ、官公吏や商人が移り住み、町は急激に発展しました。また、千葉町には公立の病院とともに医学校が設置され、「医療の町」としても知られました。

（6）戦前の海

稲毛海岸は千葉県内で最初に海水浴場が開かれた場所で、明治21年（1888年）に海気館（かいきかん）が設立して以来保養地として知られていました。鉄道の開通により、東京からの日帰り観光地となり、海水浴や行楽客で賑わうようになりました。特に、稲毛海岸の美しい海と松林は、多くの文人墨客にも愛されるとともに、遠浅の海岸は潮干狩りの名所として人々に親しまれました。

また、砂地の海岸は飛行機の滑走路としても使われたことから、稲毛海岸は「民間航空発祥の地」ともなっています。

（7）陸軍関係の学校・施設

明治41年（1908年）6月の交通兵旅団司令部と鉄道連隊第2大隊の椿森への移転以来、千葉市には陸軍歩兵学校や気球連隊など多くの陸軍施設が置かれるようになりました。特に中央区（椿森・弁天）や稲毛区（作草部・天台・穴川・小仲台・園生）の台地には軍施設が多く、その郊外には演習地も広がっていました。

（8）千葉市誕生と県都としての近代化

大正10年（1921年）、千葉町が市制を施行して千葉市が誕生しました。

昭和に入り、県都としての都市機能の充実が求められ、病院や銀行、市庁舎など様々な近代的な施設のさらなる充実が図られました。

（9）千葉空襲

太平洋戦争において、米軍は日本の地方都市を目標とした空襲を繰り返しました。千葉市でも軍需工場のほか、多くの軍事施設があったため、2度の大きな空襲を受けました。昭和20年（1945年）6月10日と7月7日（七夕空襲）です。

2度の空襲により、市街地の約7割（231 ha）が焼け野原となり、被害は死傷者1,595人、被災戸数8,904戸、被災者41,212人に及びました。

（10）戦後の復興と工業地帯の発達（千葉港の開港と川鉄の操業）

戦後、千葉市は復興への足掛かりを海岸埋立による工場誘致に求めました。

昭和28年（1953年）に川崎製鉄が操業し、翌年の昭和29年（1954年）には千葉港が開港しました。

特に、川崎製鉄千葉製鉄所と東京電力の進出は、日本の高度成長を支える京葉工業地域発展の先駆けとなり、千葉市を消費都市から生産都市へと変容させ、戦後復興の原動力となりました。

（11）近隣町村との合併

昭和29年（1954年）に千葉郡犢橋村を編入して以降、昭和44年（1969年）にかけて近隣町村を編入することで、市域が広がり、現在のような多様な特性を有する市域が形成されました。

（12）臨海部の埋め立て

戦後、消費都市から生産都市へと変容していく中で、また、京葉臨海工業地帯への企業の進出により増加した人口急増対策として、海岸部では大規模な埋立事業が始まり、その結果として自然の海岸線は消滅しました。

そこで、昭和51年（1976年）、かつての遠浅の海を再現しようと、わが国初の人工海浜である「いなげの浜」が造成され、昭和56年（1981年）には、市制60周年を記念して市民参加による「磯の松原」の植樹が行われました。

稲毛から幕張にかけての浜は、日本一の長さを誇る人工海浜として、今も市民から愛され続けています。

（13）幕張新都心の誕生

平成元年（1989年）幕張メッセのオープンでスタートした幕張新都心は、先導的中核施設である幕張メッセの設置をはじめ、業務研究ビル、教育・研究施設や、ホテル・商業施設の誘致及び幕張ベイタウン、幕張ベイパーク（若葉住宅地区）での住宅整備の推進などにより、「職・住・学・遊」の複合機能の集積が進み、就業者･居住者･就学者及び新都心への来訪者を合わせると､日々約23万人の人々が活動するまちとなっています。

特に幕張メッセは、日本初の本格的複合型コンベンション施設として多くの人々に愛され、日本経済の発展に大きく寄与しています。

（14）政令指定都市への移行

政令指定都市調査室を設置し、以後、政令指定都市移行への準備を進めました。そして、平成3年（1991年）10月18日、千葉市を政令指定都市に指定する政令が公布され、平成4年（1992年）年4月1日、6つの行政区を有する政令指定都市としての千葉市が誕生し、大都市として新たな歩みを始めました。

（15）国家戦略特区の活用

国家戦略特区は、国が定めた区域において、規制改革等の施策を総合的かつ集中的に推進することで、産業の国際競争力を強化し、国際的な経済産業拠点の形成を図る制度です。千葉市においても、Society5.0[4]の実現に向け、本制度を活用した特例事業の実施や都市部でのドローン[5]による宅配、自動運転モビリティ[6]などの新たな挑戦に取り組む企業等を支援しています。

---

[4] Society5.0：サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会であり、わが国が目指すべき未来社会の姿として国が提唱しているもの。

[5] ドローン：無人で遠隔操作や自動制御によって飛行できる航空機のこと。本市では、ドローン宅配の実用化や多分野でのビジネスモデルの創出を進めている。

[6] 自動運転モビリティ：運転者が行っている、認知、判断、運転操作といった行為の一部又は全部を、運転者の代わりにシステムが行う乗り物のこと。

3 千葉市の特性

現在約 98 万人もの人々が暮らす千葉市。

はるか「縄文」の昔から、温暖な気候のもとに豊かな自然を受け継ぎながら、この土地で先人たちが暮らしを営み、また、都市として発展していく中で築き上げられてきた、千葉市ならではの特性を有しています。

これらの特性は、現在のわたしたちが享受している市民共通の財産であり、また、それらの組合せが本市を東京圏の中でも稀有な存在としています。

本計画では、こうした未来に引き継いでいくべき「まちの宝」を明らかにし、みんなで共有するとともに、これからのまちづくりに活かしていきます。

特性 1

はるか「縄文」の昔から受け継ぐめぐみ豊かな自然

■ 日々の暮らしの中で享受できる「縄文」の昔から続く豊かな自然の恵み
■ 自然を大切にする人々の想いと行動

千葉市には特別史跡である加曽利貝塚をはじめ、約120もの貝塚が集中しており、その集積は数・規模ともに全国を見ても群を抜いています。このことから、本市が古来より豊かな自然環境に恵まれ、2,000年以上もの間、住環境が充実していたことの証左といえます。

東京湾の豊かな恵みをもたらした海辺には現在も、3つの浜（いなげの浜、検見川の浜、幕張の浜）に日本最長の人工海浜によるビーチが連なり、東京圏において貴重な浜辺を身近に感じることのできる空間が広がるとともに、内陸部には緑豊かな里山、谷津田や肥沃な農地を有し、花見川や都川といった河川が内陸部と海辺をつないでいます。

このような豊かな自然に恵まれ、自然と共生しながら暮らしを営んできたわたしたちには、古代ハスの発掘・開花や加曽利貝塚の保存活動、磯の松原の復元などに見られるように、文化や自然を大切にする心が脈々と受け継がれています。

特別史跡加曽利貝塚

人工海浜

特性❷

なんでもそろう・なんでもできる利便性と安らぎをもたらすゆとり

■ 市内でのあらゆる日常シーンへの対応を可能とする充実した都市機能
■ 職住近接がもたらす時間のゆとりと、身近な自然が生み出す空間のゆとり

千葉市は、県都として、政令指定都市として、県内あるいは東京圏の行政・経済の中枢・中核を担い、３都心（千葉都心、幕張新都心及び蘇我副都心）をはじめ、臨海部、内陸部の工業団地等に産業が集積しており、こうした機能・産業の集積は、県内外から通勤者を集める豊富な働く場を創出しています。

こうしたことを背景に整えられた生活・教育・文化芸術・スポーツ等の機能や「場」の集積は、市外に出ることなく、充実した様々な消費生活や余暇時間をもたらし、職住近接の豊かな暮らしの実現を可能としています。

その一方で、市域の約半分を緑豊かな市街化調整区域が占め、内陸部には緑が広がり、都市部には公園やビーチが所在するなど、遊ぶ・憩う・癒される・食す・学ぶなど様々な日常シーンで、豊かな自然と日常的にふれあえる機会が充実しています。

このような利便性の高さと日々身近に体感できる自然の魅力の共存は、時間のゆとりと空間のゆとり、「べんり」と「のどか」を両立させ、本市を豊かな、住みやすい「まち」に創り出しています。

YohaS2022 Blooming NIGHTS（千葉公園）

泉自然公園

特性 3

多様な交流が生み出す拠点性、拠点性がもたらす多様な交流

■ 東京圏にありながらも、地勢的な環境に起因した独立性
■ 東京、房総各方面から海外まで、高い交通利便性が生み出す多様な交流

千葉市は、古くから県内交通の要衝・房総各方面への「玄関口」として栄え、現在も、本市以東、以南を中心とする周辺地域から多くの人々が働き、学び、買い物などに訪れる、県内随一の拠点性を有しています。

こうした豊かな自然と多彩な魅力を有する房総各方面の様々な地域とのつながりにより、東京圏の中にありつつも、本市を含むエリアは一定の独立した生活圏・経済圏を形成しています。

加えて、東京や房総各方面のみならず、東京圏にある２つの国際空港からほど近く、幕張新都心を有することによって、遠く海外までに及ぶ高い交通利便性を活かした多様な交流が本市で生み出されており、多くの人々を惹きつける交流拠点としての役割を担っています。

千葉都市モノレール

幕張新都心

特性④

おだやかで温暖な気候と交流により育まれる懐の深い市民性

■温暖な気候と、まちの移り変わりにより生まれる交流の中で育まれてきた市民の柔軟さ

千葉市は、内湾である東京湾に面し、黒潮の影響により温暖な気候に恵まれ、海と陸の交通の中継地として、中世の時代から多くの人と物が行き交う商業のまちとして栄えてきました。

また、明治時代には、港町や小売商人の町から県内の政治の中心地として近代的な街並みが整備された都市へと変容を遂げ、戦後、高度経済成長期には、大規模団地が次々と造成されるなど、全国各地から人口が流入しました。

このように、房総の温暖な気候や立地環境を背景とした、人々が集まり、行き交う暮らしの中で、また大きなまちの変化とともに歩んできた歴史を通じて、柔軟性がある懐の深い市民性が受け継がれ、本市で展開される多彩な活動の底流に息づいています。

通町門前市場夏祭り（通町公園）

昭和の森

特性5

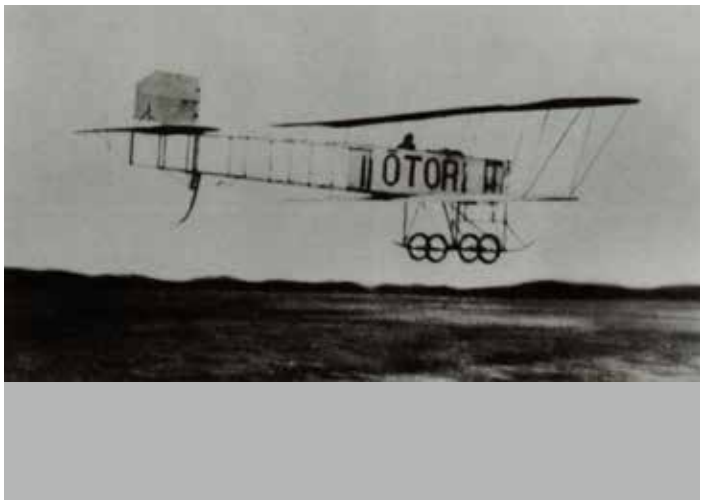
未来を拓く「挑戦都市」としての矜持

■パイオニアたちの挑戦を見つめ、支えてきたフィールド
■歴史を動かし、まちを転換する大胆さ

千葉市は、日本で初めて民間飛行場が開設された場所であり、また民間航空機で初めて東京訪問飛行に成功するなど、民間航空の先駆けとなった聖地でもあります。

また、第二次世界大戦の空襲で焼け野原となり、本市は戦後の復興への足掛かりを官民連携の先駆けとなった海岸埋め立てによる工場誘致に求めました。中でも戦後初の民営大型銑鋼一貫製鉄所となる川崎製鉄の誘致は、本市を消費都市から生産都市に転換しただけでなく、日本の重工業が発展する礎を築きました。

その後も、文化財保護のあり方に大きな影響を与えた加曽利貝塚の保存活動のほか、幕張メッセにおける新たな交流の創出や、国家戦略特区制度を活用した未来技術の実証など、その挑戦都市としての矜持は今もなお、脈々と受け継がれています。



奈良原式四号機「鳳号」（1912年）

ドローン宅配実証実験
©株式会社A.L.I.Technologies